



帰してはいけない外来患者

前野哲博, 松村真司編集. — 医学書院, 2012.

ISBN: 9784260014946

REVIEWER

医学部 医学科 4回生

本のタイトルと装丁通り、外来診療の手軽な入門書

本のポップな見た目やタイトルの「帰してはいけない外来患者」を見て外来で遭遇しそうな重篤な疾患を扱った手軽な本だ、と期待しているのであれば、まさにその通りの本である。逆に体系的な症候学やクイズ的な症例問題が読みたいなら不満が残るだろう。収録されている症例が少し非典型的、という点を除き、まさに第一印象通りの本だった。

本書の構成は総論、症候別の各論、症例の紹介の3章からなる。これらは「鑑別を競馬に例える」などといったユーモアを含んだ軽妙な語り口で説明されている。一方で、総合診療科医が後期研修医を想定して書いているためか、前提とする知識が多く、座学を終えたばかりの医学生にはイメージの湧きにくい場所も少なくなかった。

第一章の総論では、「外来における臨床決断の進め方」など、診断学の基本を外来診療という観点から説明している。基礎的な内容も多いが、座学と実臨床の違いを思い知ることができる内容だった。私にとって印象的だったのは「『帰せるかどうか』という決断は必ず下さなければならない」という箇所である。問題文から診断を下して答えられる試験問題と異なり、診断がなくとも意思決定が必要な外来の難しさをうかがい知ることができた。その他、有病率の扱いなど自分の勉強の仕方を見直すいい機会を得た。

(裏へ続きます)

492

1

Ma 27

医図開架

⇒⇒⇒

第二章の各論では、よくある症候に関して見逃してはいけない特徴と楽観できるサインを解説している。例えば「特有の咳」は見逃してはいけないが、「可視範囲に水泡のある咽頭痛は、たいてい安心」できるサインである、というように「帰してはいけない患者の見分け方」という本書のトピックに沿った説明がされている。一方で、症候も疾患も網羅的ではなく、情報の粒度にもムラがあるため、体系立った症候学の勉強には向かないと感じた。

第三章は症例紹介である。研修医と指導医の会話で経過を描写した後で、症例の詳しい解説がある。クイズとして楽しむには情報が小出しであったり、症状が非典型的だったりするが、鑑別を上げる練習になった。また、研修医が徐々に成長しているかすかな物語性や二人の掛け合いも読み物として面白かった。

気軽に読める本を探していて、「帰してはいけない外来患者」というタイトルにピンときたら読んで損はないだろう。

受理：2019-01-16